

ウイグル古典文学と東西文化の関係について

——ウイグル族古典文学簡史(上)——

マイマイティミン・ユスフ
买买提明・玉素甫
高橋 庸一郎(訳)

訳者 記

- 一 本書は、中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市で、ウイグル文化の発掘と新興を目的の一つとして設立された、「中国少数民族哲学及社会思想史学会」新疆古典文学研究学会及び「新疆十二木卡姆基金会」の主席である买买提明・玉素甫氏の、欧米講演時の草稿である。
- 二 原文は英語で書かれている。
- 三 人名、地名、書名については、先ず片仮名でその読みを表記し、次に原文の通りのウイグル語発音をローマ字で表記したものを掲げ、その後に、わかっているものについては、中国に於ける漢字表記を付した。
- 四 少数民族の固有名詞、とりわけ人名についての漢字表記は人によって異なるため、必ずしも固定的なものではない。
- 五 注釈は(下)の末尾に一括して掲げる。
- 六 本書は前述の如く、いまだ草稿の段階のものであり、出版されたものではないが、今の所ウイグル人自身の手になる「ウイグル文学史」に当るもので日本に紹介されたものは無いように見うけられるので、敢えて买买提明・玉素甫氏の承諾を得て、ここに訳出する。
- 七 上記の理由により、本書にはウイグル人自身の自らの文化に対する考え方や、評価、また今まであまり知られることのなかったウイグル系の歴史上の作家や作品を些かでも知りうるという点で意義が認められよう。

本文

中国の文化、即ち古典文学、哲学、社会思想等の歴史は、この国の多種の人々によって創造され、その人々の悠久の歴史とともにまざり合い移り変って来た。

その多種の人々は、各々自分自身の独自の文化的業績をそれぞれ異った地域で蓄積して来た。中国、とりわけ新疆ウイグル自治区は、世界の三つの代表的宗教と三つの代表的文明と三つの代表的言語系統の交わる所に位置しており、またそこは考古学的な意味での王朝の興亡とその遺跡が何代にも亘って積み重ねられて来た所でもある。同時にまた新疆は、かつての古代世界にとって重要な交流ルートが十字路のように交わっていたということによって、東洋と西洋の、経済上のそして文化面での融合の役割を果たした所の所謂シルクロードの往来繁多な所でもあったのである。

人類の歴史の上でも早い時期に、ウイグルの人々は、経済的に、社会的に、そして文化的に彼等の隣人達と交流を行って来たが、その隣人とは、丁度チイ・シェンリン(Ti Xianlin)¹⁾が、「悠久の歴史を持ち、且つ広い範囲に影響を与え、そしてその独自のな世界を形成していたという意味からは、この地球上には四つの文明しか存在していなかったのであり、それ等は即ち中国、インド、ギリシャ、そしてイスラムである」と結論づけた、所謂四大文明を起し担って来た人々である。しかしこの地球上で、この四つの文明が互いに混り合った所、それは中国ただ一箇所であり、更にこ

の中国の中の敦煌，新疆しかないのである。それはつまり，ウイグル族が世界の文明を豊富たらしめるのに貢献したということの意味しており，そしてその事は決して軽視されるべきものではないということの証でもある。

『クタディクビリク (Kutadkubilik, 福楽智慧, Happiness From Wisdom)』²⁾は11世紀のウイグル族の思想家であり，詩人であり，また哲学者であるユスプ・ハジ・ハジプ (Yusup Haas Hajip, 优素甫・哈斯·哈吉甫)³⁾の不朽の名著であり，それはカラハン王朝 (Karahhanilar Doliti)⁴⁾時代の，東洋即ち中国に於ける社会思想を，文学という意味合いの中で反映させたものであり，また社会進歩を促進させた所のウイグル族の思想，哲学，教育を深く重要な領域にまで穿ち詳述したものであり，ウイグル哲学及び古典文学史上に於ける一つの里程碑と言えるものである。それでこの著は中国及び東洋文化の奥府に深く秘蔵されて来たものなのである。しかしこの著作は長い間，東洋，西洋そして中央アジアの学会の注目の外に置かれ，やがて後にウイグル文化史研究に於ける主要なテーマとなり，源泉となったのである。『福楽智慧』は，1069年，カシガルで完成した。それは85章，13290行の詩，及び3つの補篇からなっている。この著作には著者の哲学，歴史，宗教，政治，社会，法律，教育，家庭，道德，医学，地理学，数学，天文学，外交，言語，文学，詩，演劇，戦争，そして経済などについての観点が反映されており，そこには当時のウイグルの人々のほぼ完全な全体像がえがかれている。その故に我々は，作者ユスプ・ハジ・ハジプは世界歴史の上で，プラトン，アリストテレスやベーコン，或いは孔子などと同様の名誉ある位置を与えられるべきものと考えているのである。

世界には，すでに『福楽智慧』の研究や学者が専門化されている国もいくつか存在する。この著作の中に記述されている知識と法律，智慧と道德などについての哲学的見解と理論的展開は，紀元前から紀元後1778年に至るま

での他の学術的業績と比較してみると，著者ユスプ・ハジ・ハジプの哲学的観点と世界観が極めて独自のなものであり，それだけ学術的価値の高いものであるという事実を一層強固なものとするであろう。

新疆の9世紀から13世紀にかけての歴史は，東はトルファン (Turpan)⁵⁾のカラホリジャ (Karaholija)⁶⁾，北は高昌ウイグル汗国で限られ，中央アジアではカシガルを中心とした西南部のカラハン王朝 (Karahhanilar Deliti) が出現したベシバリ (Beshbali, 別失八里)⁷⁾に接しているのである。カラホリジャ (Karaholija) ウイグルは仏教徒であり，カラハン王朝の下ウイグル人達は回教徒であった。故に此处の人々は階層や地位によってその信仰や社会的習慣がそれぞれ異なっていたが，人々はその立場によ政治的，経済的，また文化的違いの程度によって，中国大陆のそれぞれ異なった内陸部地域と関係を保っていたのである。

トルコの歴史学者アジプ・アシム (Əjip Asim)⁸⁾は、『福楽智慧』は，遼王朝 (961～1125) の哲学者達から影響を受けただけでなく，南宋王朝の学者達の思想もその内に包含していると述べたことがある。ユスプ・ハジ・ハジプのような学者が北宋と南宋王朝 (960～1279) の間に出現したということは，彼がその時代にあって孤立した存在であった訳ではなく，その時代に於て，高昌やカシガルでは他の知識人達の影響をすべての領域で感じ取ることが出来たという事である。ウイグル族の歴史的発展過程の中で経験された，文化環境にとって有益なものは次の時代にまで受け継がれ，彫刻，彫像，絵画，公共の建築物，舞踏，音楽，文学，その他現代まで大切に保存されて来た薬品などの方面で開花した。またたくさんの千仏洞の壁画や現代今なお発掘されているような，王朝の興亡によって地下，地上に蓄積されて来た，財産としての遺跡，また歌謡や舞踏という芸術面での百科全書とも目される十二ムカム (木卡姆)⁹⁾，説話伝承，古典文学上の手書きの写本，オルフン (Orhun)¹⁰⁾

溪谷とエニセイ (Yenisey)¹¹⁾ 溪谷の石のはめ額、高昌汗国時代に記録された仏教文学、そして『福楽智慧』¹²⁾、『突厥語大辞典 (Diran Nulu Katip Türk)¹³⁾、それに『真理への入門 (Ətibetül Akayik)¹⁴⁾ はすべてカラハン王朝のモスリムウイグルの偉大な遺産であり著作なのである。ウイグルの人々の古典文学と芸術はその内容が極めて豊富で、中国の文化と文学を豊かたらしめたばかりでなく、人類の文化そのものを豊かにしたのであるという事は証明するまでもない。現在ウイグル文化の古代遺産の一部は古典文学の手書き写本という形で、20箇国の30を超える研究学会と博物館に保存されており、またそのうちの多くの部分は大英博物館のそれぞれの専門部門や、インド、ニューデリーの国民博物館、ベルリン博物館、ドイツ共和国の科学的学術文化遺産博物館、レーニングラード博物館、パリ博物館の西域文化研究機構やその他に保存されている。

ウイグル古典文学の発展は、豊富な民間文学の著積の中から形づくられ、ウイグル古典文学史は口承民間文学と記述された文学の双方の発展過程のステージの上に見ることが出来る。素朴な民間物語うた、民歌民謡、伝承、民間俗諺、おとぎ話、これ等はウイグルの古代史の早くから受け継がれ、代々言い伝えられて来たのであり、『オクズ・ナーメ (Okuz Name)¹⁵⁾、『アルギナ・クンの詩 (Ərginə Kun Dastani)¹⁶⁾、『英雄タン、アハ (Tung Ah Batir)¹⁷⁾ などは数えきれない程多く存在する民間物語の数例である。『オクズ・ナーメ』は古代ウイグル語で書かれ、13世紀にトルファンで発見された。『オクズ・ナーメ』の内容と記述は、こうした物語が形成されうるような、ウイグル族がまだそのトーテム信仰に生きていた、正しく考慮に値する重要な時代を反映している。11世紀の偉大なウイグルの言語学者ムハメド・カシカリ (Məhmut Kəxkəri, 馬合穆德・喀什噶里) が、その著作『突厥語大辞典』の中で、英雄はカシガルという彼自身の地所で生れ育ったと述べたその『英雄タン

アハ (Tung Ah Batir)』から導き出して、彼は我々に何故カシガルが古代に「管理センター都市」として知られるようになり得たかという問題に対する答えの手がかりを与えてくれている。それ故に素朴な民間物語うたは、11世紀以前にすでに流布していたということが言えるであろうし、そのことはウイグルの悠久の歴史を再度確認させてくれることになるのである。

民間伝承文学のいくつかの例の後に現われた著述された文学は、これまた後代に偉大な影響力を持つものであったということが言える。古代の文学的著作としての『オクズ・ナーメ』は、その内容がゆたかであり、筋の組み立ての面で複雑であるというばかりでなく、文体の面でも美しく、言語的表現面でも簡潔である。こうした特徴は、この後の時代に続く文学作品に受け継がれ、また『オクズ・ナーメ』のようなスタイルの、近代ウイグルの韻文的詩文は、その独特なスタイルが後世の人々の詩の中に受け入れられているということを証明している。さらにまた『オクズ・ナーメ』の中で使われている言葉は、現代のウイグル語に近ということもその特徴の一つである。『英雄タン・アハ』もまた後の著作された文学に対して『オクズ・ナーメ』と同様に強い影響力を持った作品である。英雄タン・アハの苦難が人々によって悲しみとして表現されている所を『突厥語大辞典』から引用すると次のようである。

英雄タン・アハは前に進んで行った。しかし邪悪な世界は決して我々から離れることなく、……、そしてその邪悪な世界は今満足しているにちがいない。我々の悲しみが、我々の心臓が槍で突きさされ、内臓が釜で煮られるような苦しみを超えている間に¹⁸⁾。

この悲歌の構成、表現言語、スタイルは現代のウイグル語や文学に匹敵するものである。時代の流れの中で少しは変化していても、普通のウイグル人には理解されうるものである。

『オクズ・ナーメ』、『英雄タン・アハ』、『ア

ルギナ・クンの詩』やその伝説及び他の民間文学の中のいくつかの優れた著作は、ウイグル民間文学の研究にとって意義深いものであるばかりでなく、ウイグルの著作された文学の研究、とりわけ物語詩の創作や、著作された文学の歴史での表現言語に対しても意義深いものなのであった。『オクズ・ナーメ』が古代ウイグル語で書かれ、世に流布された後、中央アジアの歴史家アフーズ・カディルハン(ǝphǝz Kadirhǝn)¹⁹⁾が1606年にチャガタイで書いた『トルキック・システム(Turkic System)』²⁰⁾にその一部が含まれているということは確かなことである。その後1915年に西洋の学者が『オクズ・ナーメ』からの抜粋をドイツ語に訳した。その頃から『オクズ・ナーメ』に多くの国の研究者達の注意が寄せられ、これについての文章も多く書かれるようになったのである。

人類社会の発展にしたがって、ウイグルの著作された文学は、色彩豊かなウイグル民間文学を育てた土壌から溢れ出た。8世紀のトンヨコク・ステレ(Tonyokok Stele)²¹⁾とクルチキン・ステレ(Kültikin Stele)²²⁾は、著作された文学で、今日まで残っているものの中で最も早期に属する例である。トンヨコク・ステレは韻文で書かれており、これには多くの格言が含まれている。こうした事実は我々に、伝承民間文学は、著作された文学の源泉であり、そして伝承民間文学の存在は少なくとも8世紀にまでさかのぼり得るという事を教えてくれる。

9世紀の中葉から13世紀の初頭まで、ウイグルの人々は二つの地方政権を樹立した。それは高昌ウイグル汗国と、カラハン王朝であり、それ等はウイグル文学が隆盛し、不朽の著作と翻訳を世に多く送り出した時代であり、約360年間続いたのである。

高昌ウイグル汗国時代の文学上の業績は、(それはカラハン王朝に先行する時代であるが)翻訳著作によって注目されるべきである。その当時仏教を信仰していたウイグルの言語

学者や作家達は、仏教、哲学、天文学そしてその他の分野の知識を多く含む文学的著作を中国語やサンスクリット語からウイグル語に翻訳し、またサンスクリット語やチベット語(Tuhār)で書かれた著作を中国語に翻訳したのである。ここにその名を挙げる価値あるもののうちからいくつかを挙げると、ベシュバリ(Beshbali, 新疆別失八里)のシンクサリ(Singkusali, 勝光薩里)によって中国語から訳された『玄奘伝(The Biography of Xuanzang)』²³⁾と『アルトン・ヤルク(Altun Yaruk, 金光明最勝王経)』²⁴⁾である。『アルトン・ヤルク』は仏教説話と仏教理論を記述した秀れた著作である。今日まで『金光明最勝王経』の中国語訳、サンスクリット語訳、チベット語訳の各本が散見されているが、これ等はみな、誰もウイグル語訳より勝れたものであるとはみなしていない。シンクサリの文学的技術と芸術的感覚、そして表現用法的確さについての人並みすぐれた適応力には他の追隨を許さないものがある。他のウイグルの作家達や翻訳者達も、『キスタニ・イリグ・ベグの物語(Qis-tani Ilig Beg, 乞斯塔尼伊利克伯克故事)』²⁵⁾や、『マイテリ・シミット(Mayteri Simit, 弥勒会见記)』²⁶⁾をチベット語から中国語とウイグル語に翻訳した。キスタニ王の生前のほめ讃えられるべき英雄的行為と、述べられている彼と邪悪怪物達との戦いは、彼の人民を死よりも悪い運命から助ける為であった。それはまた善と悪との内面的葛藤でもあり、それが最終的には善の勝利によって終るということは、人々の理想と希望の反映であると言えるのである。『弥勒会见記』は手書きによる仏教説話である。中国では、古代ウイグル語によるこの著作の翻訳は、他のいかなる言語の翻訳よりも完全なものである。彼等はウイグルの著作された文学の発展、推進とその前進を正確に映し出すという点について重要な役割りを演じた。彼等はまた、ウイグルの古典文学に於て、その言語上のスタイルを、後にウイグルの人々がイスラム教に改宗してから以後の

文学的言語と区別する為に準備し、こうした古代のウイグル文学言語を研究するという特別な価値を考えに入れていたと結果的には言えるのである。

高昌ウイグル汗国の時代は、その翻訳という業績によって知られているばかりでなく、多くの詩人達を排出したということでも知られている。その中には、アプリングル・テキン (äpringur Tekin, 阿普林巖特勤)²⁷⁾、クル・タルカン (Kültarkan, 厥達干)²⁸⁾、アスグ (Ash Torung, 阿色格)²⁹⁾、ハリムキシ (Kalim Kaysi, 哈里木凱什)³⁰⁾、シリヒ・テキン (Silih Tekin, 女性)³¹⁾、などがいる。前掲のシンクサリ (勝光薩里) は翻訳者として知られているばかりでなく、詩人、言語学者としても知られている。当時の汗もよく知られた詩人であった。このようにして彼等は高昌ウイグル汗国の時代には著作された文学が大いに花開かせたという知識を我々に与えてくれているのである。

カラハン王朝の時代は、ウイグル人がイスラム教に改宗しはじめた時代であり、またウイグル文学における仏教の影響が、イスラム教の影響にとって替りはじめた時代でもある。この歴史上の一時代はいままでに決してなかった程の、ウイグルの政権、経済、文化、そして文学的、芸術的方面にわたる繁栄を見た時代であったということが証明されている。

『福楽智慧』『突厥語大辞典』『真理への入門』といったものは、カラハン王朝時代の文学や文化の発展を如実に証明するものとして注目されるものである。

『アチビトル・アカイク (ätibetül Akayik) 真理への入門』は、アハマト・ユグナキ (ähmät Yügnäki, 阿合买提・玉格乃克) によって著されたが、彼は12世紀の終りから13世紀のはじめに生きた人物で、もう一つの偉大な著作『福楽智慧』が書かれた後の人である。そのテーマは、知識、道徳、疑問、判断、賢明、幸福、勇気、そして本当の愛の重要性を鼓吹するというものである。また弾圧、偽善、下劣、残酷、不法なることの悪を容赦なくあばくこ

とでもある。『真理への入門』の言語学的、文学的ありかたから、我々は『福楽智慧』からの強い影響を感じ取ることが出来るし、またこの作品の歴史的意味深さの理由によって、中国や外国の学会の興味を奮起させた事を、またこの研究がそうした学会に於て当然主題となり得たことに納得することが出来るのである。

『突厥語大辞典』は『福楽智慧』の後、3年間で完成し、カラハン王朝のウイグル言語学の偉大なる業績であると考えられる。その著作編集の過程で著者のムハメド・カシカリは、トルコ語系の言語をはなす種族が生活している所と接触をはかる為に、また方言、格言、歌謡、そして彼の著作の中で使用されている古代の詩歌を蒐集する為に、またトルコ語系とアラブ語系とを比較対照する為に遠く、広く旅行をし、そして百科全書的著作を2年と少しという短期間のうちに完成させたのである。文学的観点から言えば、この著作はウイグル古典文学を研究する上で、それが散文、韻文、格言、歌謡から抜粋して来ているという点で極めて重要であるし、また言語学上の観点から言えば、この著作が語られ、また記録された古代ウイグル語についての貴重なデータを提供しているという点で、それは比較言語学的研究の上で模範的なものとなっている。

高昌ウイグル汗国とカラハン王朝とそれに続く時代は、ウイグルの著作文学が、翻訳と詩に於いて大いに栄えたばかりでなく、散文や小説もまた文学的ジャンルの中で重要な位置を占めたのである。『キサ・スル・アンビヤ (Kissä Sul änbiya, Life of the Saints and Sages, 聖人と賢人の生活)』³²⁾ は、ナスリディン・ラブクズ (Näsridin Rabkuzi) によって書かれ、非常に装飾的文章である。その物語は、ある人物達にまつわる事件や話や、東洋世界に広く流布していた歴史的伝説を基礎とし、それらを、理想的な歴史的姿の活動者として一つに結合して完成させ、こうして規範的象徴とし

て提示したものである。この著作の内容は、主に仏典、キリスト教的教義とコーランから引いて、それにつよい宗教的色調とおとぎばなしのような理想主義を与えているのである。しかし文学的著作としては、結局は善が悪を凌ぐという勝利を広め、人々に希望と理想を用意提供しているものであり、その歴史的価値は決して過小評価されるべきではないのである。その文学的スタイルと、ウイグル古典文学の伝統をうけつぎ発展させた特有の言語は、ウイグル古典文学研究に強力な歴史的判断力を提供した。『キサ・スル・アンビヤ』は『福楽智慧』の250年も後に現われたのであるが、それ等の文学的表現は基本的に同じである。これは『福楽智慧』の文学的表現言語は、ウイグルの文学的言語の発展についての研究にとって重要な作品である所の『キサ・スル・アンビヤ』の書かれた時代に用いられた文学上の言語とは同じ時代であるということを強く確認させるものである。

もし我々がウイグルの著作された文学は高昌ウイグル汗国とカラハン王朝の時代に花開いたというならば、それは歴史上チャガタイ期⁽³³⁾として知られているチャガタイ時代に満開に達したと言えるだろう。その時代とは元朝(1271~1368)の創設者『チンギスカン(Genghiz Khan)』が彼の王国をその息子達の間に分け与え、西の地域を2番目の息子、元朝の中央政権の支配権をチャガタイ汗国の下に一つにして確立してチャガタイに継がせたという汗国の時代である。それはチャガタイ汗国が存在した時代、即ち歴史の上では「チャガタイ期」として知られる時代である。カナート・ハカニヤ(カシガル人)の地域内で主に用いられていた言語は、それもまた、チャガタイ語と呼ばれていた。そしてその言語で書かれた文学は「チャガタイ文学」と呼ばれているのである。

歴史の上で、この時期は、ウイグルの著作された文学の業績が更に発展した時期であった。多くのよく知られている作家達や詩人達

がこの王朝時代に世に現われ、彼等はその業績によって当時の文壇に光彩を放ったのである。彼らはサツカキ(Səkkaki, 賽卡克)³⁴⁾、ルトウヒ(Lutfi, 魯提菲)³⁵⁾、アムリ(ǝmri)³⁶⁾、ガダイ(Gadai, 刃達依)³⁷⁾、アタイ(Atai, 阿塔依)³⁸⁾、マハメト・ハラズミ(Məhəmmət·Harəzmi, 穆罕默德・花喇子米)³⁹⁾とヤキニ(Yəkini)⁴⁰⁾などいく人かおり、彼等はウイグル著作文学の創造性を新たな高みにまで引き上げたのであるが、それはウイグル文学史におけるもう一つの一里塚であると言える、チャガタイ期に於けるウイグル文化には、それに先行する年月と比べてみれば、多くの変化と進歩があった。これ等の変化と進歩は明らかに注目し得る点が二つある。一つは形に於ける多様性の提示と比較であり、もう一つはその内容と文体である。歴史の上で、この時代の歌謡は比較的隆盛しており、それは基本的には科学と文化、道徳と行動、法律と裁判を推奨するものであり、その時代の人々に思考と道徳を携えながら歩みつづけることを、その前の時代の教訓的なものよりも比喩的な提示を使いながら、呼びかけるものなのである。その提示とは、ケセル(Kezel)⁴¹⁾、格言、マハマス(Məhəmməs)⁴²⁾、ムサダス(Musəddas)⁴³⁾、タルジイバンド(Tarjiiband)⁴⁴⁾、ムサマン(Musəməñ)⁴⁵⁾、ヤルバイ(Rabai)⁴⁶⁾の形をとっているのである。ルティフィ(魯提菲)の『グル・ワ・ナワルズ(Gul Wə Nəwruz)』⁴⁷⁾は叙情詩的な印象の1例である。

元朝の崩壊は西域のチャガタイ汗国を終末に導いた。しかしチャガタイ人は、カシガルを主体としながら20世紀の初期にまで存在したのである。たとえチャガタイ汗国がより長く存在しなくとも、人々はまだチャガタイ語で書かれた著作を「チャガタイ文学」と呼んだのである。故に「チャガタイ文学」という概念はチャガタイ汗国時期のウイグル文学に限っているわけではなく、20世紀のはじめ頃までに書かれたウイグル文学も含むのである。

16世紀以後、新疆の南部のカシガルとヤル

カンドの地域にヤルカンド⁴⁸⁾ 汗国が出現した。この時代はウイグル文学の発展を新しい高みにまで引き上げた。その特徴は、多くの詩人や作家達が庶民の中から輩出したという点ばかりでなく、汗とその親類縁者達もまた創作活動を行い、また文学活動をおしすすめたという点にある。スルタン・サイドハン (Sultan Səidhan)⁴⁹⁾ は、彼の息子のアブトリシタン (Abdurixithan)⁵⁰⁾、スルタナ・アマンニサハン (Sultana Amannisahan)⁵¹⁾、キディルハン・ヤルカンディ (Kidirhan Yarkandi)⁵²⁾ とともに当時の文学界の有名な手である。

キディルハン・ヤルカンディは彼の著作集の序文である主題についての多様な変化を伴った9部の作品を書いたと述べている。それから20世紀の初頭にはヒルキティ (Hirkiti)⁵³⁾、ムハメド・サディク・カシカリ (Muhəmmət Sadik Kəxkəri)⁵⁴⁾、アブドレヒム・ナザリ (Abdurehim Nazari)⁵⁵⁾、クンナム (Gumnam)⁵⁶⁾、ザリリ (Zəlili)⁵⁷⁾、ナワルズ・ズムイイ (Nawruz

Ziyaiy)⁵⁸⁾、トルディ・ハルビイ (Turdi Hərbiy)⁵⁹⁾、ビラル、ナジム (Bilal Nazim)⁶⁰⁾、タジャリイ・モウラ・ビラル (Təjəlli Molla Bilal)⁶¹⁾、イブラム・モシフリ (Ibrayim moxhuri)⁶²⁾、ウイビティ (Uwibti)⁶³⁾、サボリ (Sabori)⁶⁴⁾、そしてアルシ (Ərxi)⁶⁵⁾ のような詩人や作家達が出現したのである。彼等の作品は彼等が「福楽智慧」からその作法をうけついだものであるとみられている。偉大な詩人ナワイ (Nawayi)⁶⁶⁾ の美学とイデオロギーについてのユスプ・ハジ・ハジプ (Yüsüp Haas Hajip) の影響については、『ウイグル文学簡史 (A Brief History of Uighur Literature)』ロシア語版1948年モスクワ、Birtilisによって出版された『ナワイについて』) の中ではっきりと述べられている。言語という点で、『福楽智慧』の影響は更に後のウイグル族の作家達に、その作品の構成や、叙述的スタイル、そして理想を探究する為の表現として、より深い影響を与えたのである。

(1997年10月24日受理)